

“漢字で教える”漢字教育

昭和 38 年に講談社から刊行した『一年生でも新聞が読める』という本で(本巻・第二巻I)、「小学校一年生の漢字教育は、“漢字^を教える”教育であってはならない。“漢字^で教える”教育でなければならぬ」ということを説いた。

それは、学習心理学で言われる「覚えようとしなくて覚えた記憶はいつまでも残るが、覚えようとして覚えた記憶は必ず失われる」ということに^よ因る。

例えば、試験のために覚えようと努力して覚えた記憶は、試験が済めば覚えている必要がなくなるので自然に忘れられてしまう、というのが頭の本来の働きである。覚えるのが頭の働きなら、忘れるのも頭の働きである。だから、漢字学習を、覚えようとして覚えさせてはいけないのである。例えば、「試験をするから漢字をよく覚えて来なさい」というような形で行う学習では、試験が済めば忘れるのが当たり前である。これでは、「忘れるために漢字を学習する」ということになる。事実、どの学校の教師でも、「テストの時には漢字が書けても作文やノート

にはその漢字が書けない」と言って嘆く。「作文やノートに自然と使える」ような漢字力でなければ、真の漢字力ではない。

母国語の学習では、だれも「教えよう」と身構えて教える者はいないし、「学ぼう」「覚えよう」と努力する者もない。それでいて、だれもが母国語に熟達するのである。それは、母国語が語られる実生活の中で自然と耳にし、耳にしている間に自然とそれを理解し、覚えてしまうからである。

このように、教える者に「教えよう」という意識がなく、学ぶ者に「学ぼう」「覚えよう」という意識がなく、自然と覚えだけ国語だから、「自然と使える」のが当たり前であろう。だから漢字の学習も、教える者が「漢字を教えよう」と思わず、また学ぶ者も「漢字を覚えよう」と思わずに自然と漢字を覚えさせるのに任せたら、作文やノートに自然と使える漢字力が養われるのである。

この教育法を、従来の「漢字を教える」漢字教育に対して、「漢字で教える」漢字教育というのである。「漢字で教える」漢字教育は、あらゆる領域の教育を“漢字で”行うだけのものであって、子供が漢字を覚えようが覚えまいが、それは問題にしない。